

【小説部門・奨励賞】

フトン屋のばあちゃん

私立二松学舎大学附属高等学校 第2学年 中村文音

お祖母様が危篤状態です、と連絡が来たのは夜遅くだった。父方の祖母、フトン屋を営んでいたばあちゃんも今やベットの住人。一命は取り留めたと説明する医者言葉を、私は話半分に聞いていた。

「もう長くはないでしょう」

父はそっと息を飲む。私はただ、そうだろうなと思った。憔悴したばあちゃんは先が長いようにはとても見えなかった。とくに感傷らしきものは浮かんでこない。私は、ばあちゃんが嫌いだった。

ばあちゃんは私が小学校に上がる前に認知症になった。そのせいで、人が変わったように荒々しくなった、らしい。私には優しかったばあちゃんなんて、記憶にないから分からない。

「家に迎えようか」

父が言った。どうせ短い間なのだから、最後まで一緒に居てあげたい、その気持ちは何となくわかった。しかし、うちに寝たきりのばあちゃんを受け入れるためのゆとりは無い。場所もそうだが、共働きの両親と学生の私では、四六時中そばにいられるわけがなく、結局、ばあちゃんは病院で最後を待つことになった。

静かに眠っているばあちゃんの顔をのぞき込む。久しぶりに見たばあちゃんは、記憶よりも一回り小さくなっていて。思い出のばあちゃんは、常に怒っていて私に怒鳴ってばかりだったから、尚更かもしれない。子供の頃の記憶というのは、やはり当てにならない。あんなに怖かったというのに、ばあちゃんがどんな声で怒鳴っていたのか、もうすっかり忘れてしまった。

ばあちゃんの余命宣告から数日経って、高校から帰ると、なにやら家の中が騒がしかった。見知らぬ男物の靴を見て、お客さんかと納得する。どうせ知らない人だろうし、と自室へ籠ろうとしたとき、父に呼び止められた。

「琴葉の大叔父さんがいらっしゃってるんだ。こっちに来て挨拶しなさい」

「……大叔父さん？」

そんな人が居たなんて、と私は目を剥いた。大叔父さん、つまり祖父母の兄弟だ。ちなみに私には、ばあちゃんしか祖父母は居ない。

「こんにちは、ことちゃん。まあ、君にとっては初めましてかな」

「私、会ったことあるんですか？」

「うん、君が産まれたばかりの頃にね、一度だけ」

大叔父さんは朗らかな人だった。聞けば、やはりばあちゃんの弟だという。しかし、たぬきのような顔の大叔父さんとばあちゃんはあまり似ていなかった。ばあちゃんはもっとつり目で、キツイ顔をしている。

「ねえさんが、もう長くないって聞いたから駆けつけたんだ。顔は見たけど、まあしばらくこの辺にしようと思ってね」

その間よろしくね、と笑う大叔父さんに私はそっと頷き返した。

大叔父さんは写真家だった。「世界を股に掛ける大物写真撮影家」と自称していたけれど、果たしてどこまで本当なのか疑わしいところだ。そもそもの話だが、大叔父さんは見た目からして怪しい。伸ばしっぱなしの髪やダルダルの T シャツ、くたびれたジャージに髭まで生やしている、お世辞にも清潔とは言えない見た目だ。父に紹介されなければ、一生関わることの無い人種だったろう。ばあちゃんとは十歳ほど年が離れていると聞いたが、随分と老けて見えた。

「……ほんとに写真家？」

「ほんとだって！ もうことちゃんったら、疑り深いなあ」

ブツブツ言いながら、大叔父さんは自分が撮った写真をあつめたアルバムを見せてくれた。

「どうだ、これで信じたろう？」

と自慢げに胸を張る大叔父さんに、今回ばかりは反論しなかった。たしかに、すごい写真ばかりだ。

「ここ、どこなの」

「ああ、これはたしか、北極だね」

さらりと言ってみせた大叔父に私はぎょっとした。

「北極！？ 北極ってあの？」

「そうだよ。だから言ったろ、世界を股に掛けてるんだって」

「ほ、他には？ どこに行ってきたの？」

パラパラとページをめくって、大叔父さんは答える。

「これがパリ。これはジャワ島。これは、アフリカだな、先住民と“じどり”したんだ」

肌が黒い外国人と大叔父さんが並んで笑っている写真、確かに自撮りだ。

「ほんとなんだ……」

私は呆然と呟いた。まさか自分の身内にこんなアグレッシブな人間が存在したなんて、思ってもみなかった。

「ねえ、大叔父さんはどうして写真家になったの？」

フトン屋は“ばあちゃんのばあちゃん”の代から続いていたらしい。大叔父さんがなぜフトン屋を継がなかったのか、何となく気になって私は問いかけた。

「んー…、やっぱり写真が好きだったからかな。元々は旅行が趣味だったんだけど、そこ

から高じてね」

「へえ、じゃあ天職だね」

「そうだね、天職だ」

大叔父さんはへらりと笑う。

「いい写真には愛情がこもってるんだよ。愛情があるから素敵に撮ろうと思えるんだ。僕はそんな写真が撮りたくて写真家になったから、本望だけど」

大叔父さんは、そこで言葉を切って短く息を吸った。

「ねえさんは…、そうじゃなかったはずなんだ。僕が家を飛び出したから、仕方なくフロン屋になっただけで」

大叔父さんは後悔が滲む口ぶりでそう言った。世界を股に掛ける大叔父さんが、ばあちゃんの危篤に駆けつけた訳がなんとなくわかって、私は何も言えなくなった。

「あんたは布団屋になるんだろう！！」

私の記憶に残る一番古いばあちゃんとの思い出は、そう言ってパチンと頬を叩かれた時だ。ばあちゃん嫌いに拍車がかかった出来事でもある。学校で書いた将来の夢に「美容師さん」と綴ってあったのを見て、ばあちゃんは目を釣りあげた。大泣きする私と暴れるばあちゃんを見た両親は、ばあちゃんを施設に入れることを決意した。それから六年。ばあちゃんは外に出ることなく、その命を終えようとしている。

ばあちゃんの体調は良くなったり悪くなったりを繰り返していた。意識が戻る時もある。一日中寝たきりの日もある。起きていても認知症が進んだばあちゃんには、誰だか分かりはしないのだが。

今日は寝たきりばあちゃんの日だったので私は仕事終わりの母が迎えに来るまで、ばあちゃんの隣にある病室の椅子に座っていた。一日のうちに必ず一人はばあちゃんのところに行こうと家族で決めたため、気は進まなかったが仕方がない。大叔父さんは朝、猫と戯れているのを見たきりだ。

ここは静かで、喧騒とは程遠かった。ばあちゃんの呼吸音と点滴の落ちる音で満ちた部屋は、集中するのにうってつけ。課題を終え、授業の復習まで済ませた私は手持ち無沙汰になって、ぼんやりとばあちゃんの顔を眺めていた。

改めて見たばあちゃんの寝顔は記憶の中よりも穏やかだった。今のばあちゃんのなら、大叔父さんに少し似ているような気もする。

「…お待たせ、おばあちゃんに変わりはない？」

母が来たのはそれから三十分は過ぎた頃だった。母がばあちゃんに少し話しかけた後、病室を出て帰路に着く。

「琴葉がそばに居てくれて、きつとおばあちゃんも喜んでもるわ」

「……そうかなあ」

私は心の中で母に反論した。なにしろばあちゃんは眠っている。私がいると分かるわけ

ないし、分かったところで喜ぶはずがない。

顔を逸らした私に構わず、母は話を続ける。

「…それでね、フトン屋を売りに出すことにしようかって、お父さんと話したの」

「えっ…」

「ばあちゃんアンチ」の私にとっても、それは衝撃的だった。

「……ど、どうして？」

「うーん…、おばあちゃんももう長くないって言うし、わざわざ名義変えて相続するほどでもないでしょう？ 大叔父さんとも相談して、それがいいだろうって決めたのよ」

「……そう、なの…」

呆然とした私に母は言った。

「だからね、大叔父さんと一緒にフトン屋の片付けに行ってほしいの。お父さんの結婚した時に大抵持ってきたから、後はおばあちゃんと大叔父さんのだけなのよ」

ばあちゃんに叩かれた日から、フトン屋に足を踏み入れたことは一度もなかった。しかし、気がつけば私は頷いていた、なぜか躊躇いはなかったのだ。

そしてその週末、私は言われた通り、大叔父さんとフトン屋を訪れた。長い間下ろしたまんまだったシャッターを上げて、埃っぽい家の中を進む。フトン屋は幼い頃の記憶のまま残っていた。襖のシミも、壁の傷もそのまんま。大叔父さんも同じことを思ったようで、懐かしそうに目を細めた。そういえば、大叔父さんにとってここは実家だった場所だ。

「ねえさんはここを大切にしてたんだなあ…」

綺麗に畳まれた布団たちを見た。くたびれてはいるが、ほつれも破れもなく丁寧に使われていた事が伺える。大叔父さんは辺りを見回して、安心したように微笑んだ。

「あれ…？」

布団だらけの押し入れの奥から、小さなアルバムが出てきた。大叔父さんのかと思って差し出したが、首を振られる。

「多分、ねえさんのかな。僕ほどじゃないけど、ねえさんも写真好きなんだよ」

言いながら表紙を開いた大叔父さんの手元を覗き込むと、見覚えのある顔が目に入った。

「お父さんと、お母さんだ」

若かりし頃の二人が幸せそうに笑っている。と、言うことは真ん中でにこにこしている赤ん坊は私だろうか。

「ああ、これ！ 懐かしいな、こんな所にあっただ」

「これ、大叔父さんが撮ってくれたの？ すごいね…、とっても素敵」

暖かな雰囲気と窓から差し込む光。恐らく両親は撮られたことに気がついていない。それくらい自然で幸せそうな写真。恐らく撮られたのはここ、フトン屋だろう。

「いや、それは僕じゃないよ」

大叔父さんは首を振った。じゃあ誰が、と、問いかける前に大叔父さんは言った。

「ねえさんなんだ、カメラは僕のだけど」

「ばあちゃんが…？」

私が驚くと、大叔父さんは困ったように笑った。

「ねえさんはね…、本当はやさしいひとなんだよ。ことちゃんは覚えないかもしれないけど、君のことだってすごく大切にしていたんだ」

私はふと、大叔父さんが言っていた言葉を思い出す。

「ばあちゃんが、私を…？」

もう一度、握られた写真を見つめた。何度見てもやっぱりいい笑顔だ。父も母も、私も。

「ねえさんは、やさしいひとだよ」

大叔父さんはもう一度、囁くように言った。

あの日、私を叩いたばあちゃんの手は、とても冷たかった。でも、本当にそうだっただろうか？ ばあちゃんの声や、顔を忘れてしまったのと同じように、私はなにか大切なことを失念しているのでは？

私の心が囁いた。けれど、それがなんなのかどうしても思い出せない。

私の顔を覗き込んだ大叔父さんは、優しく微笑んで頭を撫でてくれた。

「さ、片付けだ。どうせ使わないものばかりだから、高く売れそうなのはことちゃんのにしてしまおう」

「…うん、」

どうせ、と言った大叔父さんが少し悲しそうに、私も同じように大叔父さんの手を取った。

フトン屋が売り渡される頃になって、とうとう医者に「覚悟してください」と言い渡された。ばあちゃんはもうずっと、死んだように眠っている。これでは生きているのかも分からない。

大叔父さんは、ばあちゃんの手を取ってよく話しかけていた。ばあちゃんはピクリとも動かなかったけれど、聞こえていたらいいと思って、私も一緒に声をかけた。

「…きみこさん？」

私は驚いた。昨日まで、眠りこけていたばあちゃんが、いきなり話しかけてきたからだ。だから、たとえ母親と間違われようとも構いはしなかった。

慌てて大叔父さん呼びに行こうとしたところを、ばあちゃんに声をかけられて留まった。

「ことちゃんはどうしたの？一人にしたらダメじゃない」

「…お、お父さんが見てくれてるので…、大丈夫ですよ」

私はなるべく母の口調を真似してそう答えた。

持ってきた花束を花瓶に挿してから、ばあちゃんの傍に座ってゆったりと言葉を交わす。

「ことちゃん、かけっこで一位だったんですってね」

「ええ」

「お友達と喧嘩しても、自分から謝れたって」

「うん…、そう聞きました」

今の私には全く覚えのない話ばかりで、相槌を打つことしか出来ない。ばあちゃんの世界は、もうずっと進んでいないのだと改めて気がつく。だから大叔父さんは、ばあちゃんに子供の頃の話しかしなかったのか。

「あのね、きみこさん。ことちゃんがね、この前ふとん屋さんになるって…、そう言ってくれたのよ」

脈絡もなく始まった話に、私はそっと息を飲んだ。言ったのだろうか、フトン屋になると。私がそう言ったから、ばあちゃんは。

「…そう、ですか……」

言うべきだろうか。今の「ことちゃん」にはフトン屋になるつもりなんてないことも、もうフトン屋でさえばあちゃんの元にはないことも…。

「すごく嬉しくて泣いてしまったら、ことちゃん、慰めてくれたの」

やっぱりすごくいい子ねえ、と呟いたばあちゃんは、私に向かって微笑んだ。

「だから、早く元気になって、ふとん屋さんに戻らなくちゃね」

声が出なかった。私はばあちゃんの手を取って、しっかりと握りしめた。ばあちゃんの手はシワシワで、でも暖かかった。

「琴葉も、会いたがってますよ」

言いたいことは山のようにあったけれど、きっと母ならこう言うであろうと思った。

「…きっと、素敵なふとん屋さんになりますから、」

ばあちゃんはにっこり笑って、私の手を握り返した。

そしてその夜、帰らぬ人となったのだった。